
カノン

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カノン

【Nコード】

N0732E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

待ち続ける。それが私に出来る唯一のことだから。だから辛いんだよ。それしか出来ないから。

今日も雪が降り続けている。

深々と分厚く空を覆う重たい雲から、重さを感じさせない白い羽が舞い降りてくる。

「はぁ・・・」

私は今日も一人で待っている。

もう、何時間経っているのかも分からないくらいここにいる。

毎朝、みんなが通勤通学する時間に、私も家を出る。バス停の近くにある、屋根も何もない雪に埋もれた、赤のベンチ。そこに私は腰掛け、静かに時間が過ぎるのを待つ。目の前を通り過ぎる人の雪を踏む音。誰も立ち止ることなく、サクサクと雪を踏みしめていく。あんなに真白で綺麗だった雪が、泥にまみれて解けていく。

「はぁ・・・」

手袋をしていても、長時間外にしていると流石に冷たくなるのが自分でもよく分かる。口に手を当て、息を吹きかけると、ほんの少しの間だけ気持ちさが和らぐ。

周りは白一色。

時間が過ぎるに連れて、車も走らず、風も吹かず、何も音も匂いもしなくなる。あるのは冷たい空気と私。

「いつまで、こんなことしてるんだろう」

私は誰にでもなく、呟いた。私の声は雪に飲み込まれて自分でも聞こえないくらいだった。

時には、声と一緒に私も飲み込まれても良いとさえ、思うことがあった。

やがて、遠くから雪を踏みしめる音が近づいてきた。私は顔を上げた。

「あつ・・・」

でも、すぐにまた視線を下に向けた。

「大丈夫かえ？」

私の前で止まったおばあちゃんが、心配そうに声を掛けてくれた。
「はい、人を待っているだけなので大丈夫です」

私が笑顔でそう言うと、おばあちゃんは安心したようで、また歩いていった。

「はぁ・・・」

再び私は静かにベンチに腰を下ろし、その場に佇んだ。

世界は広くて大きい。小さなことが起きても、明日はやってくる。私のことなんて、時間も世界も気にはしない。無常に流れていく。その中で私は止まっている。

一人でいると、色々な考えが頭の中を駆け巡っていく。最近の私は、一人でいることが多い。そして、一人で泣いていることが多い。一人でいると色々な考えが頭を過ぎる。それはあの日の思い出だつて。だから私は一人でいる時は涙を流すことが多い。

どうしても、会いたくなってしまふ。声が聞きたくなってしまふ。あの日よりも過去を思い出すと、涙が止まらなくなってしまふ。

だから私は、こうして学校にも行かず、ベンチに腰を下ろし待っている。

いつの間にか空が暗くなっていた。肌に感じる冬の冷たさが、心の中にまで否応無しに染み込んでくる。楽しい気持ちや嬉しい気持ちが全部凍らされてしまふ。自分のしていることが無意味にしか思えなくなってしまう。

「みーちゃん、まだこんなところにいるの？」

不意に私の前に影が出来た。

「お姉ちゃん・・・」

お姉ちゃんの姿を見ると、私は意味もなく涙が溢れそうだった。

「もう、学校は終わりだよ？」

お姉ちゃんが温かい眼差しで私に手を差し出してくれる。

「今日も、行かなかったのね」

私は、学校の制服にコートを羽織っている。傍から見れば、平日

の朝からずっとここに居るのはおかしいと思う。今朝だって私はいつものように家を出た。ただ違うのは、私の目的地は学校ではないということ。

私はどこへ行きたいのかな。自分でも分からない。

「ほら、今日はもう帰ろう?」

お姉ちゃん私は私が学校に行かないことを咎めたりしない。それはお姉ちゃんだけじゃない。お母さんも、お父さんも私が学校に行かずに毎日このベンチに居ることを知っている。なのに、誰も私を叱ったり蔑んだりしない。ただお母さんも、お父さんも、お姉ちゃんも、

「行つてらっしゃい」

優しい笑顔で送り出してくれる。私はその度に心が締め付けられ、苦しくなる。でも、そんな時も家族が私を支えてくれる。

今の私には、勉強よりも大事なことがある。世間の人からすれば、理解してもらえないとは思えない。きっと、私は正しくない子として認識されるはず。

本当は今の私にとって、何が大切なのか分からない。だから私は止まってしまった。

「今日も一日中あそこにいたの?」

手袋越しに伝わる、お姉ちゃんの手は凄く暖かった。

「うん・・・」

私は手を繋がれたまま、ゆっくりと答えた。

「でもダメだった」

「そっかあ、それじゃあ明日も頑張らないとね」

私は凄く恵まれていると思う。学校にも行かず、ただ待っているだけなのに。

「おかえり、美衣」

うちに帰ると、お母さんが迎えてくれた。

「もっ、こんなに冷えちゃって。先にお風呂入って体を温めてきなさい」

「それじゃ、みーちゃん。一緒に入るつか？」

私はお姉ちゃんに連れられてお風呂に向かった。

「もう、どれくらい経つんだろうね」

私は湯船に浸かり、お姉ちゃんは髪を洗っている。シャンプーの香りが何だか優しい。

「分かんない」

私は温かいお湯に身を任せていた。何もなくても温かくて、このまま眠ったらどれほど気持ちが良いんだろうなあって思ってた目を閉じる。

「美衣」

お姉ちゃんが私を呼んだ。

「ん？」

「我慢しちゃダメよ」

お風呂で、そういうことを言うお姉ちゃんはずるいと思う。あの場所ならきつと頷くことくらい容易いのにな、こんなにも温かくて優しい所でそんなことを言われたら、頷くことすら出来ない。

「うう・・・ひつく・・・」

湯船に私の涙が小さな波紋を広げた。

「みーちゃん、我慢しないで、素直になっごらん」

私は、もう我慢できなかった。

「うわああん・・・」

小さな子供みたいに声を上げて泣いた。次から次へと涙が止まらなかつた。悲しくて悲しくて仕方がなかつた。

「うん、それで良いんだよ」

泣いてる私にお姉ちゃんは、そう言っで撫でてくれた。そうされると、気持ちが溢れてきて、どんどん涙が出てきた。悲しい涙と、逢いたいと願って愛おしく感じる涙が止まらなかつた。

あの日は、いつもと何も変わらなかつた。いつものように学校へ行って、その帰りに一緒に楽しい時間を過ごしていた。人生で一番、

幸せというものを感じていたかもしれない。

《美衣つ》

でも、そんな時に、私は人生で一番辛い思いをした。ううん、あの時は何が起こったのか全然理解出来なかった。

急に体を押され、私は数歩先に体のバランスを崩し、倒れた。その瞬間は、一瞬とは思えなかった。自分の体がこんなにもゆっくりと動いているなんて、不思議でなかった。

でも、それは本当に一瞬だった。ほんの数秒前まで、私の隣で、私が好きな笑顔を見せてくれていた人から、その笑顔が消えていた。大きな音と共に。

私が振り向いた時には、全てが終わってた。

ついさっき一緒に買った、おそろいのストラップが、静かに携帯と共に、転がっていた。

何の冗談だろう？ その状況の意味が分からなかった。

純白の雪が舞い降りて、辺りが真白に染まっているはずだった。

でも、その時、私が見たものは真紅の雪。

ほんのさっきまで、あんなに楽しい時間があつたのに、一瞬で、

ほんの一瞬で、全てが終わってしまった。

私は動けなかった。目の前で起きた状況を受け入れられるだけの器は私にはなかった。あまりにも大きな出来事で小さな私には、受け止めることが出来なかった。

その日から、私の時間は流れなくなった。流れに逆らうでもなく、流されるのでもなく、そこに留まったまま。前にも後にも動けなくなった。

その後、私はご飯を食べる気にもならず、部屋に戻った。

「やっぱり、あの子にはまだみたいね」

「うん。みーちゃんはまだ吹っ切れてないわね。あの子、お昼も食べないで、ずっとあそこにいたわよ」

「・・・そう。わざわざごめんね。折角の休みだったのに」

「いいのよ、気にしないで。みーちゃんがああなのに、私だけ自由にやるなんて出来ないし、あの子の気持ちは私も分からないでもないから」

「そう。やっぱりあなたたちは姉妹ね」

「そうよ。皆、家族なんだから。家族のことを想って悪いことなんてないでしょ」

部屋に戻ってから、私は枕を濡らしていた。一度思い出すと、なかなかその感情は治まってくれない。

「美衣、いいかしら？」

ドア越しにお母さんの声が聞こえた。

「・・・開いてるよ」

鼻を嚙り、涙声で何とか声を絞り出した。

暗い部屋の中に、暖かな光と優しい香りが入ってきた。

「ご飯よ。ここで食べる？ それとも一階で皆と食べる？」

お母さんの声が凄く私の中に響いた。

「・・・ここで食べる」

枕に顔を押し付けて、強引に涙を拭く。

今は皆に顔を見られなくなかった。泣き腫らして、酷い顔になっているのを、お父さんには見られたくないから。

「そついうと思ったわよ」

部屋の電気がつけられ、急に眩しくなつて私は目を覆った。

この日も私は、結局甘えてしまった。本当はいけないと分かっているのに、それでもやっぱり、私は甘えるしか出来なかった。

「ごめんね、お母さん」

お母さんのご飯は、とても温かくて、今日一日を忘れさせてくれるような優しい味だった。

「どうして謝るの？」

私が謝っても、お母さんは可笑しそうに私を見ていた。

「学校にも行ってないし、毎日毎日何もしてないから」

そんな私にお母さんは、

「勉強よりも、大切なものなんですよ？　だったら、途中で投げ出しちゃダメよ。自分に納得がいくまで自分を信じて、やりなさい。お母さんたちは、あなたが元気でいてさえくれたら、他には何も望まないの。美衣は何も悪いことはしてないんだから、謝られてもお母さん困っちゃうわよ」

そういつて微笑んでくれた。

辛いことがあつたら、時間が癒してくれるなんてよく言うけど、今の私にはそれは通用していない。今は高校三年の冬。本来なら受験勉強に忙しいはずの年。でも私は、二年も学校に通っていない。私の時間はきつとあの日から流れていない。今の私には友達もいないし、年相応の学力も何もない。時間が私を癒してなんかくれない。「ごちそうさまでした」

「お粗末様」

私を癒してくれるのは、お母さん。

私を甘えさせてくれるのは、お姉ちゃん。

私を何も言わず、見守ってくれるのは、お父さん。

私は時間に何もされていない。でも、私は一人じゃない。何も出来ない、いるはずもない人を待つしか出来ない私を支えてくれる人がいるから、私は今を私として生きることが出来ている。

「お母さん、ありがとう」

いくら感謝しても感謝しきれない。

「今度はどうしたの？　今日は何か変よ？」

「うつん、なんでもない。ただ言いたかっただけ」

お母さんが笑顔で私を抱きしめてくれた。

「あなたはあなたの信じることをしなさい。それでも、結果が伴うことは期待できなくても、自分の信じた道をあなたは生きなさい」
「はい……」

私は間違っていることをしている。いなくなった人が帰ってくるなんてことはない。なのに私は待っている。全てを投げ捨てても私は、待っている。

でも、私は間違っていない。自分を偽って、楽しくもないのに笑い、悲しくもないのに悲しむ。そんなことは私はしていない。私は自分の信じていることをしているから。

私はそんなことを思いながら、眠りに就き、また明日からの私の日常に向かって未来へ歩いていく。未来なんてものじゃないかもしれない。あの日から私は前に進んでいないんだから。

進み続ける時の中を、ただ一人で、そこに漂ってるだけ。

それでも、私は待ち続ける。

私が生きている間にはきっと会えない。それは分かっている。

でも、私はその人に逢いたい。もう一度声が聞きたい。あんな別れ方なんて、私は嫌だから。

そして、私はその人に言わないといけないことがある。言いたいことがある。

今の私は、あなたが助けてくれたから。生かしてくれたから。

だから私は待ち続ける。私を救ってくれたあの場所で。そして、いつかきっとあなたに伝えたい。

「ありがとう。ごめんなさい」と。

きっとあなたは、私がこんなことをするために私を助けてくれたのではないと思う。

きっとあなたは、今の私のことを見たら、助けなければ良かったと思うかもしれない。

だから私は、あなたにお礼と謝罪をしないといけない。

いつになるかは分からない。きっと私が生きている間は言うことは出来ないと思う。ううん、出来ないのは分かってる。もうあなたは、ここには居ないから。

でも、私はそれでも良いからいつまでもここで待ち続ける。

それが、私の信じているたった一つの生き方だから。

お母さんやお父さん、お姉ちゃんにはきっと私はいつまでも頭が上がない。甘えてばかりで、何も出来ないから。

だからせめて、私は一つのことだけでも成し遂げたい。みんなに、私は何も出来ないことを知ってもらい、たった一つだけ出来ることがあることを認めてもらいたい。

だから私は、いつものように制服に袖を通し、コートを羽織、学
校カバンを手にして、いつものように家を後にする。

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

そして、今日も私はあの場所へ向かい、あなたが来るのを、小さな花束を片手にいつまでも、あの場所で待ち続ける。

きつと、もう私は、あなたに追いつくことも、追い越すことも出来ない。

あなたは私よりも、ずっと先へ行ってしまったから。

だから私はあなたをもう、追いかけない。悲しくて、寂しくて、満たされるものがないけれど、ここであなたを待つことを、許して欲しいな。

通勤通学していく人は誰も、私を知らない。私も、誰も知らない。だから、誰も誰かを見ない。自分ひとりで、歩いていく。

白い息が、灰色の空に溶けていく。いくつも白い息が、楽園を求めて彷徨う魂のように、ソラへと上っていく。

あなたは、今どこにいるの？

そんなことは、もう今までに数え切れなくらい、心の中で問いつてきた。

私は、どうしたらいいの？

それも数え切れなくらい、自問した。未だに答えは出せない。

「あつ……」

私の前に、誰かが携帯を落とした。雪に少し沈んだ携帯。私の全てが、そこに向いていた。

あの日と、同じだった。同じ携帯に、同じストラップ。

「えっと、あのー……」

気づいた時には、それを手に取っていた。無意識だった。

不思議そうに私を見る、携帯を落とした人。

その瞬間、全てが覚めた。

「あ、ごめんなさいっ」

慌てて、私は携帯を返した。

「あ、いえ、どうも」

自分でも意味が分からなかった。体が勝手に動いていた。

「あの、学校、行かないんですか？」

その人は、私を見て首を傾げていた。

「・・・・・・・・」

私は答えなかった。答えられなかった。

「こんな所にいたら、風邪引きますよ？」

どうしてだろう、目の前にいる人は私を知らない。私も知らない。なのに、いつかの日を思い出してしまう。

「これ、どうぞ」

半ば無理やりだった。私の手のひらに温かいカイロが乗せられた。「何があったのかは、分かりませんが、きっといつまでもそこにいても、あなたの願いは叶わないですよ。あなたが願うなら、そこから立ち上がって下さい。きっと、それを望んでいますよ。そこにいる、彼は」

「えっ」

私は顔を上げた。どうして、私の思うことを知っているの。私は顔を上げた。でも、ほんの一瞬の間に、その人は人ごみの中に消えていた。

私は信じられなかった。驚いて後を振り返った。そこには、何もなく、誰もいなかった。なのに、あの人は言った。

《きつと、それを望んでいますよ。そこにいる、彼は》

どうしてだろう。急に胸の辺りが熱くなった。私はベンチから腰を上げ、辺りを見回した。でも、私の視界に、私が望むものは映されなかった。

「いる、の？」

ベンチ方に向かつて、すぐるように声を漏らした。勿論、私の問いには誰も答えてはくれなかった。

「あつ……」

でも、私は大きく目を見開いた。鳥肌が全身に走った。言葉が出なかった。

もしかしたら、単なる見間違いなのかもしれない。でも、今の私には、それを疑う気はなかった。

私の視線の先には、今朝私が家を出る時に持ってきた、小さな花束。

揺れていた。

風も吹いていないのに、小さな花が、不自然に揺れていた。

車の振動だったのかもしれない。私がベンチから腰を上げた時に、振動が伝わったのかもしれない。

でも、私はそれを見て、涙が頬を伝った。

私は、その日、その場を離れられなかった。感じていたかった。

あの日の温もりを。

あの日の微笑を。

あの日の思い出を。

そして、私は一言、伝わったかは分からないけど、伝えたかった言葉を、そこへ向けて静かに呟いた。

「ありがとう……、ごめんね……」

涙で、声が震えてた。その場にしゃがみ込んでしまった。

周囲から、心配そうな声をかけられたけど、私は涙を止められなかった。

私が見たものは、本当はそれだけじゃなかったから。

あの時、私には、他の人には分からないかもしれないけど、あの人の、私が好きな笑顔を、心を通して見た気がしたから。

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

私はいつものように、制服に身を通し、学校カバンと花束を持つ

て、あの場所へ向かう。でも、そこが私の目的地じゃなくなった。
もう少し先まで、行けるようになった。

私は強くなったんじゃない。ただ少し歩き出しただけ。

「良かったね、みーちゃん」

遅くなったけど、私は少しずつ、これから一步を踏み出して、私
を支えてくれた人達のために、私の大好きな人の分まで、流れ続け
る時間の中を歩んでいく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0732e/>

カノン

2010年10月8日15時16分発行